2010年（平成22年）
第35号
（11月15日）

平安月報

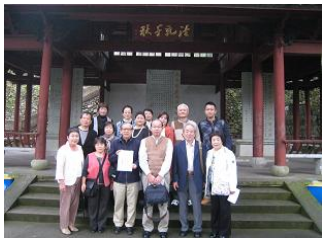
The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

中国・無錫で日中韓仏教者が交流

１０月１８日・１９日、中国・江蘇省無錫市の霊山梵宮を会場に「第１３回日中韓仏教友好交流会議」が開催された。同会議は、日本、中国、韓国の仏教者が集い、相互理解と交流を深めることを目的とし、毎年三国が交替で開催されている。今回のテーマは、『「黄金の絆（きずな）」の調和精神を継承・発展させよう』。

１９日、三国合同の「世界平和祈願法要」が営まれ、各国代表者がそれぞれ平和を祈願。午後、「三国講演会」が行われ、三国仏教界の「黄金の絆」を強めるとともに、世界平和や環境保護などへの仏教徒の社会的役割を盛り込んだ「共同宣言」が採択された。



京都教会から日中韓仏教交流協議会常任理事をつとめる中村教会長ら、16名の会員が参加した。

天理教、薬師寺を見学

新宗連京都府協議会・他教団訪問

１０月８日、新宗連京都府協議会では、毎年恒例の教団訪問として、奈良の天理教と薬師寺を見学した。

最初の訪問先の天理教では、神殿を参拝し、礼拝場で「おぢば」「かんろだい」の説明を受け、教祖殿をお参りした。その後、参考館に移動して、天理教の紹介ビデオ鑑賞があり、特別展「よみがえるヤマトの王墓」を見学した。

午後は、薬師寺を訪問。翌日の天皇・皇后両陛下お迎えの準備で忙しくされている中、副館長に案内してもらい、一同は境内を参拝した。

天理教を訪問

薬師寺にて

１８名の議員が参加して早起き会

１０月２５日、京都教会研修室において佼成議員懇話会が開催された。早朝７時にメンバー１８人の議員が参加して、情報交換会と朝食会が行われた。

冒頭に、同会副幹事長の山本正・京都府議会議員より「佼成会と長いつきあいができるように無理をせず、政治と宗教がお互いに協力していくべきだ」とあいさつがあった。

引き続き、参加議員から「健全な心を持つために、よき家庭づくりが基本」「アームズダウンを経験し、平和に向けて取り組む」「懇話会で心の問題についても学んでいきたい」といった発表があった。その後、中村教会長がアームズダウンへの協力の礼を述べた。

「人間の尊さ」学ぶ　人権問題研修会にて

１１月４日、京都府立総合社会福祉会館（ハートピア京都）において京都府と京都府宗教連盟の共催による京都府宗教法人関係者人権問題研修会が行われた。

花園大学名誉教授・禅文化研究所所長の西村惠信氏が「人間の尊さ」－仏陀の教えに学ぶ－と題した講演があり、仏教に基づく人権について学んだ。その後、「浄土宗本願寺派の取り組み」について活動報告があり、高齢者問題を考える「老いを生きる」という啓発映画を鑑賞した。

毎年開催されるこの研修会は、政治的・社会的差別からの解放という問題より根源的な人間としてのあり方が学べる機会となっている。

時事刻々

本会の庭野開祖生誕の日の十一月十五日は、七五三の日でもある。旧暦の十五日は、鬼が出歩かない日といわれ、何事をするのも吉だとされた。

特に十一月は一年の実りを神仏に感謝する月で、氏神に収穫の感謝をかねて子供の成長を感謝したことから、七五三の祝いが始まったという。

この頃各神社で見られる光景だが、着飾った子供を前にシャッターを切る親たちの姿にほほえましさを感じる。

こうして祝われる子供がいる一方で、最近児童虐待が問題になっている。虐待された子供に多い特徴に、変わった名前が多いという。（京都市教育委員会）

桜桃（ゆすら・男）、苺優（りおな・男）、澪慧（れい・女）、來生（ゆずき・女）といった名前は、読めるだろうか。

命名といわれるように、子供の名付けは大切だ。その時の親の思いがその子の一生を左右するのかも知れない。

１１月１５日は庭野開祖の生誕会です。式典の模様は次号に掲載します。

商店街で市民とふれあい「もちつき」（中央明社）

１０月３１日（日）、中央明るい社会づくり運動の会（中央明社）が京都三条商店街コミュニティーホール前において「もちつき」を実施し、商店街の買い物客につきたてのお餅を販売した。

中央明社は、毎年この時期に「ふれあいバザー」を開催している。アーケードの下に響き渡るもちつきの音に、道行く人が引き寄せられ、つき上がったお餅を買おうと行列になり３時間ほどで２５０個（２個入り）を完売した。

もちつきを初めて経験した人もあれば、飛び入りで参加した人も多く、昔はよくやったがしばらくしていないという方もおられ、市民とのふれあいの時間がとれたことで、明るい社会づくりに貢献できた。

教育者教育研究所が大阪で「相談研修会」

１０月２３日・２４日、大阪普門館において教育者教育研究所主催の「教育相談研修会」が開催され、各教会から教育関係者ら１００人が参加した。

同研究所の西村倭子専任講師が『いま　あなたは　幸せですか？』をテーマに基調講義を行い、参加者は分科会で聴き方の演習やロールプレーイングを通して、教育相談の基本となる共感をもち傾聴する姿勢を学んだ。

わが子健やかにと願い「七五三参り」

１１月３日、京都教会にて七五三参りが行われた。着飾った会員子弟３４人が参加して、精一杯着飾った子供たちにより、晴れやかに式典が行われた。

子供たちの代表が導師などを勤め読経供養を行った後、一人ひとりに中村教会長から千歳飴（？）が手渡された。そして、教会長からお祝いの言葉があり、教会全体が祝福のムードに包まれていた。

今月の言葉　～ご縁を味わう・感謝する～　京都教会長・中村憲一郎

今月の会長法話は、「ご縁を味わう」です。

ご法話では「縁」を「ご縁」と表現していますが、日本人は古より、大事なもの、尊いものには「お（ご）」とか「さま（さん）」をつけて表現して参りました。「ご本佛さま」「おお神さま」「お天道さま」「ご先祖さま」「お父さま」「お母さま」等々、生活の中にある尊いものを尊く拝んできたのです。「ご縁」もまた尊いものです。

人は誰もが自分一人の力で生きているのではなく、あらゆるものごとのおかげを頂き、生かされている真理を、釈尊は縁起―縁りて起こる―と説かれました。ふれるご縁の一つ一つを大事に「おかげさま」と感謝していくと、毎日が幸せで、楽しく豊かなものになると会長先生は教えます。

めぐりあわせのご縁を、そのまま感謝で受け取れる柔らかな心が人を幸せに導くのですね。めぐりあわせのご縁を豊かに味わうためにはどうしたらよいのでしょうか。会長先生は、まずふだん当たり前と思っていること、たとえば家族とのご縁に目を向けてみることを勧めておられます。朝目が覚めて顔を洗えること、食事が頂けること、家族が元気でいられること、掃除や洗濯ができること、家族が無事に帰宅することなど、そのどれもがさまざまなご縁による奇跡のような《有り難い》ことであるのが分かります。

書道家の武田双雲さんは、前向きに生きるためには「上機嫌力」を培うことが大切とし、日常生活の中で起こる出来事を深く味わい、どんな小さなことにも感動し、感謝することが大切と語っています。例えば食事の時、目を閉じて時間をかけて咀嚼するというのです。そうすると食材の香りや歯ごたえ、うまみ、飲み下す感覚などを味わうことができるといいます。こうした「感性」を働かせると「こんなに美味しかったのか」と自ずから感動が生まれ、料理そのものだけでなく、調理や生産した方たちにまで感謝の念がわき起こってくるというのです。

苦しいことや辛いことなど、一見好ましくないご縁に対しても同じです。「苦は楽の種」といわれるように、味わい方や受けとめ方によって苦も楽に変わるのです。病気がやさしさを育て、貧乏が克己心を育てるのです。

今月は、今すでに頂いているすべての尊いご縁に感謝し、苦境に立つ人や孤独感を募らせている人のよき縁（善き友）となれるよう精進して参りたいと思います。

●下がる修行

佼成会のことば（行法ガイドブックより）

『信解品』で説かれる「長者窮子の譬え」に出てくる長者は、長い間、放浪の旅を続けて身も心もすさんでしまった息子（窮子）を教化するために、自ら着飾った衣服を脱ぎ、窮子と同じような粗末な服に着替えて近寄っていきました。また『常不軽菩薩品』に出てくる常不軽菩薩は「あなた方を決して軽んじたりしません。あなた方は必ず仏になる方々ですから」と言って、どんな迫害にも耐えて礼拝行に徹しました。このような「下がる修行」は自分自身の修行としても、人を教化する時にも大切な修行です。

ところが、現代人の多くは「下がる」という言葉が服従を意味し、自分の主体性がなくなってしまうように受け止めてしまい、抵抗を感じるかもしれません。あるいは「なんであんな人に下がらなければならないのか」と疑問に思う人もいるでしょう。しかし、どんなに優れた人でも、すべてを知り尽くしているということはありません。だからこそ、謙虚になって、触れ合う人から学ばなければならないのです。しかも、「一切衆生悉有仏性」の教えのとおり、すべての人は仏になる可能性を秘めており、私たちはそうした人々のお陰で生かされているのですから、いつも謙虚な気持ちで接しなければなりません。「下がる修行」は、初めのうちはものすごく忍耐のいる修行です。それを繰り返していくうちに我が取れて自分の仏性が少しずつ開顕し、相手の仏性を拝み出していくことができようになってきます。すると周囲の人々の環境も変わって見えてくるのですから、本当にありがたい修行をしているのです。私たちは成仏を目指して修行をしていますが、仏さまから見たら、まだまだ至らない者です。そのことを自覚し、仏さまの前にひれ伏して修行し、そして縁ある人に対しても謙虚になって学んでいく。そうした人間になることを、仏さまは願われているのです。

本願につながる・・・大安心　ー仏教を生活に生かす「日常生活の中の仏さまの教え」ー

仏さまは、私たちがすべてを尊く見ることができるようにと、色々な出来事を現して下さっています。ですから、私たちは、どんなことに出会っても安心していいのです。安心して喜び、安心して苦しみ、安心して悲しんでいいのです。ただその中で、光っているものを光と見る眼を磨くことが大切です。光を見出し、すべてを拝んでいけたなら、生きていることそのままが、仏になる道なのです。

すべてを拝める人とは、どんな人なのでしょう。その男性は会社を経営していました。ところがある時、順調だった会社が、不況のあおりでスポンサーに降りられ、大きな負債を抱えてしまいました。青年時代から教会で活動をし、修行してきたのに、先行きの不安で、つい幹部さんに「世の中がこう大変になると、さすがの佼成会の教えも役に立ちませんね」と、皮肉めいた言葉を口にしてしまいました。

それを聞いた幹部さんは「本当にそう思っているんですか。あなたを見ていると、いま現在が困っているだけのように見えるけれど、今まではいったいどうだったんですか？」と、逆に問い返しました。「今までは、どうだったのか」そう問いかけられた男性は、開祖さまのご法話を読み返し、自分の心を見つめてみました。確かに、これまで会社は順調でした。たくさんの仕事と幸せを頂き、そして自分も真剣に仕事に取り組み、多くの方に支えて頂いていたことを思い出しました。

それではいま、**この苦しい状況の中で、仏さまは自分に何を教えて下さっているのか、何をしなさいと言われるのか、**と考えました。男性は、自分の心を立て直そう、仏さまの願いに沿った自分であろうという気持ちで一杯でした。仏さまの願いとは何かを考えた末、翌日から、奥さんと一緒に、お世話になったお得意先へお礼に回ることにしました。

行く先々で「聞いてるよ。お宅いま大変なんだってね」と、同情とも励ましともつかない言葉が返ってきます。それに対し、何を言われたとか、どんな受け答えをするかというより、ただひたすらに相手の仏性を拝み、自分の仏性でふれ合うのだと、心に決めていました。その心を具体的な形に現したのが、今までのお礼に歩くことでした。そして、もし仕事が与えられたなら、精一杯感謝して請け負っていこうと心が定まりました。

そんな時です。ある会社で「いま、大きな仕事があるんだか、あなたの所は危なそうだと聞いて、他に頼もうと思っていたんだ。だが、あなたの姿勢は素晴らしい。気に入ったよ」と、仕事を回してくれたのでした。それをきっかけに、この男性は会社の経営を見事に立て直すことが出来ました。

「われわれの心が本来のすがた(仏性)に目覚めれば、すべての人間・すべての生物・すべての物質が大調和した世界(寂光土)が現出する」のです。

エコキャップ回収状況　１０月末現在　**４６，８００**個　（ワクチン**５８．５**人分）

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《イラン特使の来訪》

国連の場で、イランの考えを世界の人々に聞いてもらう。世界宗教者平和会議はそのイランの訴えを全面的にバックアップしよう。そのために、まずイランが米大使館員の人質を解放しなければならない。もし必要ならば、身代わりになろう・・・・・。その庭野開祖の決心を知って「我々も人質の身代わりになります」という青年部員の申し出が秘書室にあったという。その青年たちの申し出は、何よりの励ましであった。

イランへの出発に先立って、庭野開祖は世界宗教者平和会議国際委員会の委員たちに連絡をとった。たまたまイランに出発するのと同じ日程で、タイの首都バンコクで、カンボジア難民救済活動の推進などについて討議する国際委員会が開かれることになっていた。国際委員会のメンバーは口々に「またとない機会です。世界宗教者平和会議を代表して、全世界の宗教者の願いをホメイニ師に伝えてほしい」と激励して送り出して下さった。

昭和５５年６月２日から４日間、イランの首都テヘランでホメイニ師の招集で開催された国際会議には、５４ヶ国から約４００人が参加した。サウジアラビアの王政打倒をねらうシーア派や、アフガニスタン解放イスラム同盟の指導者、ヨーロッパ各国の共産党員、ＰＬＯ（パレスチナ解放機構）のメンバーたちの、超大国弾劾の演説が延々と続いた。イラン革命がイスラムの教えに基づく聖なる革命であることが強調され、第三世界の団結が呼びかけられた。ホメイニ師にもお会いしたが、大勢の人々の中では、とても人質解放など口にできる雰囲気ではない。

庭野開祖は、会議の議長を務めていたバニサドル大統領とゴトブサデ外相に狙いをつけて、会議の合間にアプローチし、ようやくゴトブサデ外相と接触することができた。「イラン政府は、すみやかに人質を解放してほしい。しかるのちに国連においてイラン革命の正当性を主張すべきである。**かく言うからには、私も米国大使館員の身代わりに人質になる覚悟でテヘランに来ている。私一人では人質として足りない場合は、多くの立正佼成会の青年が志願しているから、いつでも呼び出せる用意がある」それを文書にして示すと、ゴトブサデ外相は目を見開き「グレート！」と大きな声で言い、「もう一度話し合う機会を、ぜひ持ちたい」と言ってくれた。**

解決の糸口とはいかぬまでも、話をするきっかけがようやくつかめたかに見えた。だが、日本に帰国して、さらに細部について連絡を取ろうとしていた矢先、「路線の対立でゴトブサデ外相失脚」の報が届き、一縷の望みも断たれてしまった。イラン国内で穏健派と保守派が対立して要人の暗殺が続発するようになり、ゴトブサデ外相も銃殺刑になったという。

見るからに洗練された外交官という感じの人であったが、惜しい人を亡くしてしまった。いっぽう、ホメイニ師は大変なカリスマ性を発揮して、イスラムの教えを政治の前面に出した祭政一致の体制をとり始めた。とにかく「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せというのは間違いだ。そういう時にはキリストも実力を行使したであろう」と断言するのである。(つづく)

他教団活動紹介　（中外日報１０月３０日より）

●霊友会が弥勒山大祭

霊友会（大杉市太郎会長）は９月４日から１０月１５日まで、静岡県東伊豆町の弥勒山で「弥勒山大祭」を開催した。１０月１４・１５日の全御旗大祭には、ブラジルやメキシコなど海外からの参加も含め、約１０００人の幹部会員が一堂に会した。「おもいやり連鎖運動」を先頭に立って推進している青年部は、会員・未会員を問わずに社会に役立つ活動を押し広げるため、地域リーダーの育成に努める方針を明らかにした。

私たち kinki.genki　～姫路教会より～

今年から「やくしん」に毎月掲載されている藤田寶浄氏の仏画ぬり絵を活用して教会の皆さんに「写仏ぬり絵」を募集したところ、小学生、中学生、婦人部、壮年、一般の多くの方から巾広く提出して頂きました。

渉外部からのメッセージ

アームズダウン署名運動の終了直後、近所のコンビニで、いつもお世話になっている曹洞宗のお坊さんとばったり出会いました。何でも法要の帰りだとか…。開口一番、「署名運動の件、見ましたよ、業界紙で。達成出来たってすごいですね」って言ってもらいました。業界紙ってどんな新聞だろうと気にはなりつつも、今回の取り組みが与える影響は我々の知らないところまで及んでいくかも知れないと思った瞬間でした。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266